

## 『千家詩』に見える伝統的童蒙書 (幼学書)の中国語学習

——七言絶句詠春詩を例として——

梁 敏 兒

### 一、はじめに

翟灏(一七三六—一七八八)『通俗編』に次のような記述がある。

今村塾所誦千家詩者、上集七言絶八十餘首、下集七言律四十餘首、大半在後村選中、蓋據其本増刪之耳、故詩僅數十家而仍以千家為名。下集綴明祖送楊文廣征南之作、可知其増刪之者乃是明人。(いま、村の私塾で誦まれている『千家詩』は、上集の七言絶句八十首余り、下集の七言律詩四十首あまりで、その大半が後村

の選中にあり、『千家詩』は) 思うに『後村選』に基づいて、これを増改したものである。ゆえに、わずか数十名の詩人であるのに「千家」と名づけているのである。また、下集に「明祖 楊文廣の征南を送る」詩が収録されていることから、この増改を行った人間がすなわち明人であったと知りうるのである。

上述の「後村選」とは、劉克莊(一一八七—一二六九)の編纂した『分門纂類唐宋時賢千家詩選』(以下『詩選』と略称する)を指し、また清初の私塾において広く伝わっていた『千家詩』は、『詩選』と同一のもではなく、別個に存在する簡略なテキスト(版本)である。『千家詩』の選詩体例はまず七言絶句・律詩、次に五言絶句・律詩の四種の近体詩が並び、それぞれの形式の中で更に春夏秋冬の順に各詩が並べられている。これまでの考証によれば、『千家詩』の中の七言類のほとんどがおそらく宋・元の間で作られたもので、その底本の大部分が『詩選』によっている。しかしその一方、五言類の全ては唐詩であり、七言類とは異なって中晚唐以降の近体詩を重視していることから、おそらく基<sup>2)</sup>づくところが異なっていると考えられる。

増補版の題署によると、作者は「謝枋得（一二二六—二二八）選、王相注」とある。謝枋得はかつて趙蕃（一一四三—一二二九）・韓流（一一六〇—一二二四）合編『唐詩絶句』に注評を加えたことがあり、これは宋元代において大変流行した唐人七言絶句選集となった。明代の王相がかつて撰して注を加えた『新鐫五言千家詩』もまた幼童教育に積極的なものであった。ここから推測するところ、現在伝わる『千家詩』とはおそらく二種の書物を合刊したもので、一つが謝枋得の七言本で、もう一つは王相の編纂した五言本である。その編纂はおそらく二度に分けられ、また後世においても増改を経てきた。劉鶚（二八五七—一九〇九）の『老殘遊記』第七回には次のような記述がある。

所有方圓二三百里，學堂裏用的『三』『百』『千』  
『千』都是在小號裏販得去的，一年要銷上萬本呢。  
（周匝二三百里にわたる地域ではすべて、学校では『三』『百』『千』『千』が使用され、その全てが書店直売で、一年間での売り上げは一万冊にも及ぶのだ。）

『三』『百』『千』『千』はすなわち『三字経』『百家姓』

『千字文』『千家詩』を指し、『老殘遊記』の記載によれば、『三字経』『百家姓』『千字文』は『千家詩』に比べて売れ行きがよかったようで、一般の私塾においては必ずしも詩が読まれるわけではなく、識字の目的のために『三字経』『百家姓』『千字文』が必読書とされていたことが分かる。翟灏は『通俗編』の中で清初に流行していたテキストは既に増補本であったことを指摘しており、ゆえに『老殘遊記』に見える『千家詩』とは、まさに謝枋得本と王相本を合刊した増補本のことを指しているのである。

『千家詩』は数百年にわたって失われることなく伝わっており、このことから『千家詩』が非常に成功した童蒙書であったといえるだろう。『千家詩』の七言絶句の部分は従来最も好評を博してきたところであり、宋代からその使用がはじまっている。七言律詩におよんでは、王相によって増補されたかどうかとも今のところ明確な証拠となるものはないが、四十八首の七言律詩のうち二首が明代に作られたものであることは明らかであり、このことから七言律詩の部分が宋元以降にはじめて編纂されたものであることが証明できるのである。

## 二、『千家詩』に見える繊細かつ具体的な春情

『千家詩』の七言絶句が一貫して高く評価されてきたので、これからその中の詠春詩を取り上げて、この書が童蒙書としていかに成功を可能にしたかについて検討を加えていこうと思う。『千家詩』の春の描写は生活の息吹に満ちたものである。伝統的な詠春詩は、そのほとんどが頌春・惜春・傷春に他ならず、この『千家詩』の詠春詩もその例にもれないが、頌春・惜春・傷春に関わらず『千家詩』に見える詩には樂觀的な基調が顕著に現れていることは留意すべきであろう。例えば、朱淑真（二〇九五―一三二）の「落花」はもともと惜春詩であるが、感傷に流されてはいない。本文は以下の通りである。

連理枝頭花正開、妒花風雨便相催。願教青帝常為主，  
莫遣紛紛點翠苔。<sup>4</sup>（連理の枝頭 花正に開き、花を妒  
みて風雨 便ち相催す。願わくは青帝をして常に主と為し、  
紛紛として翠苔に點すること莫から教めん。）

詩人は花の散るなか佳人の薄命を嘆き、自然の神に翻

弄されていることを感じ、自らの手で自身の運命を握みとらねばならないということに思っていたのである。この種の不可能であろうことも成し遂げようとする頑強な意志は、王令（一〇三二―一〇五九）の「送春」詩の中にも見ることが出来る。

三月殘花落更開，小檐日日燕飛來。子規夜半猶啼血，  
不信東風喚不回。<sup>5</sup>（三月 殘花落ち更に開き、小檐 日日  
燕飛來す。子規 夜半に猶お啼血し、東風喚きて回らざる  
を信じず。）

ホトトギスが夜半に絶え間なく鳴くなか、過ぎ去ろうとする春を引き止めようとするのである。感傷に流されてしまわないこの種の春情は、四十八首の詠春詩に共通して見ることができ、諷刺、説理、描写を問わず、その随所に生氣が満ち溢れているのである。これが『千家詩』の春情の下地となっているのである。

### 1. 風景構図の構成手法

『千家詩』の七言絶句の詠春詩は、ほぼ全てが風景描写による叙情作品であり、その中には盛唐詩のような、

ある種の壮大な時空間を持つ詩篇はほとんど見られず、杜常（一〇六五年進士）の「咏華清宮」にただ一首に見られるのみである。

行盡江南數十程，曉風殘月入華清。朝元閣上西風急，都入長楊作雨聲。<sup>6)</sup>（行きて江南數十程を盡くし、曉風殘月華清に入る。朝元閣の上西風急なり、都べて長楊に入りて雨聲を作す。）

この詩は空間構成がやや難しく、第一聯の地点はまず江南から華清宮（陝西省）へと転じ、次に第二聯で華清宮の朝元閣から江南の長楊殿に再び戻る。その上、時間の幅は既に述べているように非常に大きなスパンを持ち、唐代絶頂期の華清宮と朝元閣から、続いて南朝陳代の長楊殿におよんでいる。このような広大な時空間を活用して、現在と過去の対比を際立たせようとするのである。この詩の作者は宋代の人と言われており、盛唐と南朝陳の遺跡を前に栄枯盛衰の感慨を寄託して詠ったのである。

詩の時空間が広大であればその構成は難しくなりがち

であるが、『千家詩』七言絶句ではこのケースは少なく、そのほとんどが一つの風景によって構成され、情緒の動きもさほど大きなものは見られない。だが、詠春の部分で風景構図の構成にいくつかの異なった手法を用いていることは指摘しておかなければならないだろう。例えば、謝枋得「花影」と王安石（一〇二一—一〇八六）「春夜」では、時間軸にしたがって四句が連ねられ、一句に一句を接ぐ形で春の景色を描写している。

重重疊疊上瑤台，幾度呼童掃不開。剛被太陽收拾去，  
卻教明月送將來。（重重疊疊として瑤台に上る、幾度と童を呼び掃くも開かず。剛（た）だ太陽を收拾し去せ、  
卻って明月をして將來を送りせしめん）

〔花影〕

金爐香燼漏聲殘，剪剪輕風陣陣寒。春色惱人眠不得，  
月移花影上欄杆。（金爐 香燼き 漏聲殘かにして、剪剪  
たる輕風 陣陣として寒し。春色 人を惱ませ 眠るを得ず、  
月移り 花影欄杆に上る。）

〔春夜〕

「花影」と「春夜」はどちらも時間の流れにしたがっ

て作られた詩で、「花影」の作者は童子を呼んで散った花の掃除をさせ、夕暮れになる頃にようやくその花を片付け終え、まもなく月が東の空に昇り、まるまるとした月影を映し出すのである。「春夜」では、詩人が春の夜に翰林院の宿直にあたり、空がまだ明けやらぬ頃、詩人は眠れずそれを春のせいにして、庭を歩きながら月が花影にうつっていくさまを見つめるのである。蘇軾（一〇三七—一一〇一）の「春宵」では、時間軸に沿って詩句が配列されるほか、冒頭に主題を明示した後に「鋪陳」的描写をする手法がとられている。

春宵一刻值千金，花有清香月有陰。歌管樓臺聲細細，  
秋千院落夜沉沉。（春宵一刻 千金に値し、花に清香あり月に陰あり。歌管の樓臺 聲細細たり、秋の千院 落夜沉沉たり。）<sup>9)</sup>

詩の第一句で「春の宵の一刻は千金に値する」と、冒頭からその詩の主題を明らかにしてしまい、あとの三句に春の宵に酔う人の目から見た情景がそれぞれ描かれている。一句に一つの風景という構成は、杜甫（七一〇—七七〇）「絶句四首之三」においても見える。

兩個黃鸝鳴翠柳，一行白鷺上青天。窗含西嶺千秋雪，  
門泊東吳萬里船。（兩個の黃鸝 翠柳に鳴き、一行の白鷺 青天に上る。窗には西嶺の千秋雪を含み、門には東吳の萬里船を泊す。）<sup>10)</sup>

一句ごとに一風景が描かれ、第一聯では近くと遠く、下と上、静と動の対比が描き出され、第二聯で描かれるのは、窓から見える遠くのと門の外に見える長江に浮かぶ船、一方は「千秋雪」と時間を示し、もう一方は「萬里船」と地点を示している。画幅全体の遠景には山と遠くへと向かう船、近景には青々とした柳と黃鸝、上空には青空と白鷺が描かれている。

一・三句式の主題明示・鋪陳描写の手法、一句につき一風景の手法のほか、景物を二句に分けて描いた後、次の二句では一つの物を描くという手法が、高蟾（八七六年進士）「上高侍郎」や杜牧（八〇五—八五三）「江南春」ではとられている。

天上碧桃和露種，日邊紅杏倚雲栽。芙蓉生在秋江上，  
不向東風怨未開。（天上の碧桃 露を和して種え、日邊の紅杏 雲に寄りて栽う。芙蓉 生じて秋江の上に在り、

東風に向かわざれば怨みて未だ開らず。<sup>(11)</sup> (「上高侍郎」)

千里鶯啼綠映紅，水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺，多少樓台煙雨中。<sup>(12)</sup> (千里鶯啼きて綠紅に映ず、水村山郭酒旗の風。南朝四百八十寺、多少の樓台煙雨の中。)

(「江南春」)

「上高侍郎」詩は、第一聯で青い桃(碧桃)と赤い杏(紅杏)と二句にそれぞれ別の物を、第二聯では二句ともに芙蓉について述べている。「江南春」詩でも、第一聯ではその二句を東西に分け、第二聯では二句ともに寺について詠っている。

いずれの手法であれ、『千家詩』の風景描写は概ね平面を張り合わせたような傾向にあり、深く掘り下げて個人の繊細な心理を表現するのではなく、大きく広げて人間の普遍的な感情の動きを描いている。例えば、程顥(一〇三二—一〇八五)「春日偶成」、朱熹(一一三〇—一一〇〇)「春日」、楊巨源「城東早春」では、次のように描かれている。

雲淡風輕近午天，傍花隨柳過前川。時人不識余心樂，將謂偷閑學少年。<sup>(13)</sup> (雲淡く風輕く午天に近し、花に傍い

柳に隨いて前川を過ぐ。時人は識らず余心樂しむを、將に謂わん閑を偷みて少年を學ばんとすと。) (「春日偶成」)

勝日尋芳泗水濱，無邊光景一時新。等閑識得東風面，萬紫千紅總是春。<sup>(14)</sup> (勝日芳を泗水の濱に尋ね、無邊の光景一時に新たなり。等閑に識るを得たり東風に面するを、萬紫千紅總是れ春。) (「春日」)

詩家清景在新春，綠柳才黃半未勻。若待上林花似錦，出門俱是看花人。<sup>(15)</sup> (詩家の清景は新春に在り、獄才かに黃半ばにして未だ勻わず。若し上林の花の錦に似るを待たば、門を出て俱にするは是れ花を見る人なり。) (「城東早春」)

この三首は全て前聯で風景描写、後聯でその風景を下敷きに道理を説いている。一首目の「春日偶成」は、詩人が春のピクニックに出掛けて自らの閑適自得の心情を述べ、春を謳歌する少年のようになろうと詠い、その詩意は春を謳歌するのは必ずしも青少年の特権ではないというものである。二首目の「春日」詩は、作者があふれる春の日差しの中で、万物が生を新たに全てが隆盛を迎えることを悟り、色とりどりの花々が咲きほこるこ

とは春の面目躍如であり、その詩意は万物が咲きほころぶという、そのことにこそ真理が存在するとしている。「城東早春」は初春の清新な景色への喜びを描き、鋭敏な詩人の意識を惹きつけ、春の盛りの満開の花を錦に、遊覧の人は魚の群れのように、春の光景が喧騒に変わって、春も盛りになればその風景からは静けさや雅さといったものが失われてしまうことを暗示しているのである。

## 2、具体性と事物（モチーフ）

道理を分かりやすく説くことのほかに、『千家詩』の七言絶句詠春詩では、モチーフを分かり易く、はっきりと叙述する傾向にあり、その中でも花というモチーフは非常に大きな比重を占めていると言えるだろう。筆者の統計したところ、四十八首の七言絶句の中で花について言及しているものが全部で三十四首、回数にして五十一回に及んでいる。ここで取り上げられている花はどれも漠然とした表現で、精確に表現しているものはわずかである。その語句を例にあげると以下の通りである。

「傍花」、「尋芳」、「萬紫千紅」、「碧桃」、「紅杏」、

「芙蓉」、「春色滿園」、「看花」、「桃千樹」、「桃花」、「菜花」、「花開紅樹」、「花有清香」、「茶蘼」、「花影」、「花想容」、「飛花」、「桃紅」、「花飛」、「落花」、「楊花」、「花正開」、「梅粉」、「海棠」、「百般紅紫」、「殘花」、「綠映紅」、「花似錦」、「花如錦」、「花睡去」、「杏花」、「花間藥」、「葉底花」、「玉芙蓉」、「鬱金香」など。

ここで描かれている花々はその品種を特定するものは少なく、その多くが総称であり、特定しているものも、桃花、杏花、芙蓉、梅花、楊花（柳絮）、茶蘼（ツバナ）、海棠、鬱金香（ウコン）の八種のみに限られている。花がモチーフとして登場するのが五十一回のうち、品種を特定したものは十八回、その内訳は桃の花が五回、杏・楊花が三回、茶蘼・芙蓉が二回、海棠・梅・鬱金香が一回ずつで、桃の花の登場回数が最も多く、次点を杏花と楊花が占めている。これらの花々のほぼ全ては『詩選』『百花門』の項に見ることが出来るものである。「楊花」のみが『詩選』において「百花門」ではなく「竹木門」に楊柳類として収録され、『千家詩』のなかには柳が登場する詩が八首（登場回数で数えても同じく八回）あるが、

そのうちの四首が柳と同時に花のモチーフが重複して描かれていることも併せて指摘しておかなければならないだろう。つまり、花のモチーフを描いたすぐあとに、花を伴わない樹木のみをモチーフとして登場させているのである。この八首に見える語句は以下の通りである。

「傍花隨柳」、「御柳斜」、「柳絮」、「獄」、「煙柳」、「楊柳風」、「翠柳」、「楊柳月」。

さて、花と柳のモチーフの他に、『千家詩』には春雨や霧雨をモチーフとした詩は七首存在し、そのうち花や柳のモチーフと重複して用いられているものが四首あり、また、この七首のなかで雨や霧についての言及は十一回に及んでいる。その語句は以下の通りである。

「小雨」、「潤如酥」、「煙柳」、「香霧空濛」、「沾衣欲濕」、「杏花雨」、「春潮帶雨」、「雨前」、「雨後」、「雨紛紛」、「作雨聲」など。

花や柳のモチーフが視覚的である一方、雨や霧が我々に与える感覚は触覚であろう。『千家詩』のなかで、聴

覚に訴えるものとしては鳥のモチーフがあげられよう。鳥の登場する詩は計十首あり、そのうち花、柳、霧雨などのモチーフと同時に使われている詩は七首ある。鳥あるいは鳥の鳴き声について言及している語句は以下の通りである。

「亂鶯啼」、「白鷺飛」、「燕子閑」、「林鶯啼」、「雙雙瓦雀」、「燕飛來」、「子規」、「啼」、「千里鶯啼」、「黃妒」、「深樹鳴」、「呢喃」など。（また、ここに挙げた鳥に関わる語句を除けば、他の動物は「蜂蝶」が一例あるのみである。）

これまで述べてきたように、詠春詩四十八首のうち、四十二首がそれぞれ花、柳、雨、霧、鳥のモチーフを用いた作品であり、詩語を単位とするならば花が五十一回、柳が十五回、雨・霧が十五回、鳥が十九回、詩中に登場しているのである。

これらの中心的なモチーフを使用する四十二首を除いた残りの六首の詳細については次の通りである。六首のうち三首が応制詩、あるいは朝廷や科擧にまつわるもので、すなわち蘇軾「上元侍宴」、晁説之（一〇五九—

二九)「打球圖」、夏竦「廷試」である。このほか、歳時を詠った詩として王駕「社日」一首。(王駕の生没年は未詳であるが、唐末に官職を棄てて隠遁した人物である。)最後の二首は「春意」を描いたものとして、李涉「登山」、賈島(七七九-八四三)「三月晦日送春」である。(李涉もまたその生没年については未詳であるが安祿山の乱前後の人物である。)これらの詩は、花、柳、雨、霧、鳥などのモチーフを用いずに、どのように春を表現するというのだろうか。順が逆になるが、「春意」を描いた最後の二首から詳細を見ていこう。この二首の詩はともに惜春詩であり、その本文は以下の通りである。

終日昏昏醉夢間、忽聞春盡強登山。因過竹院逢僧話，又得浮生半日閑。(終日昏昏として酔夢の間、忽ち春の盡くを聞き強いて山に登る。因りて竹院を過ぎて僧と話し、又た得たり浮生の半日の閑。)<sup>16)</sup>

三月正當三十日，風光別我苦吟身。共君今夜不須睡，未到曉鍾猶是春。(三月正に三十日に當たりて、風光我が苦吟の身と別る。君と共に今夜睡るを須いず、未だ曉鍾に到らざれば猶お是れ春なり。)<sup>17)</sup>

惜春詩とは春がまさに終わろうとするのを惜しむものであり、詩中には春を示すモチーフが描かれていないのも不思議ではなく、逆に春が一瞬の光のように過ぎ行き、追いかけても追いつかないという心情こそが惜春詩の核心であるといえるだろう。

次は歳時に関わる詩、王駕「社日」。

鵝湖山下稻梁肥，豚柵雞棲對掩扉。桑柘影斜春社散，  
家家扶得醉人歸。(鵝湖山下 稻梁肥えたり、豚柵 雞棲  
對いて扉を掩う。桑柘影斜めにして春社散じ、家家醉人  
を扶け得て歸る。)(「社日」)<sup>18)</sup>

社日とは、立春と立秋から五番目の戌の日に土地の神を祭る祝日のことである。詩本文には農民たちが豊作を喜び祝う情景や、稲やアワなどの穀物、豚や鶏などの家畜、桑の木など典型的な農家の風物が描かれ、夕暮れ時に酔っ払いながらやっと家に辿りつくという、祭を心ゆくままに楽しむ普遍的な雰囲気を読み取ることができるだろう。

以上述べてきたことをまとめると、詠春詩四十八首はどれも春の詩題に相応しく、春を示すモチーフを用いず

とも、祭日の日常風景の雰囲気がある春を十分に演出しているのである。

ここで取り上げていない三首、すなわち応制詩、朝廷に関わる諷刺詩、廷試（科挙の最終試験）詩は、この四十八首の中で明らかに異質なものである。

### 3、表現の重複と微細な描写

これまで行ってきた統計から、春の風景を描写するには春を表すモチーフが存在することが明らかになったが、また詠春詩の四十五首がこれらのモチーフを一つの詩の中で重複して用いていることは実際にはどのような効果を生み出しているのだろうか。花を例にとれば、三十一首が花をモチーフとするが、これらの詩では花が幾度となく登場する。およそ次のように分類することが出来るだろう。

#### a、広角的描写によって描かれた背景

四十八首のうち七首が広角的描写の例として挙げる事が出来るだろう。その詳細は次の通りである。

「傍花隨柳過前川（花に傍（そ）い柳に隨い 前川を過

ぐ）（程「春日偶成」）

「萬紫千紅總是春（萬紫千紅 總是是れ春なり）」（朱熹「春日」）

「千里鶯啼綠映紅（千里 鶯啼きて 綠紅に映ず）」（杜牧「江南春」）

「花開紅樹亂鶯啼（花開きし紅樹に 亂鶯啼く）」（徐元杰「一九四？一二四五」湖上）

「紫陌紅塵拂面來（紫陌紅塵 面を拂いて來たり）」（劉禹錫「七七二八四二」玄都觀桃花）

「若待上林花似錦（若し上林の花の錦に似るを待たば）」（楊巨源「城東早春」）

「洛陽三月花如錦（洛陽三月 花は錦の如し）」（劉克莊「鶯梭」）

以上の広角的描写において、花が色彩を備えた背景となり、春がいたるところで表現されているのが花を登場させる意図である。例えば、「傍花隨柳」、「萬紫千紅」、「綠映紅」、「花開紅樹」、「紫陌紅塵」、「花似錦」、「花如錦」といった表現はどれも、広角レンズによって絞り込むように、一片の赤い花弁に意図を見出すのである。

広角的描写の表現法は一樣ではない。人に寄りかかろうとする「傍花」、無数の色彩に取り囲まれた「萬紫千紅」、対照的な色で際立つ「綠映紅」、木に満開の赤い花

を意味する「花開紅樹」、空間全体を赤く染めつくしてしまふような「紫陌紅塵拂面來」、錦の織物の絢爛な文様のような色彩を放つ「花似錦」など、一口に広角といっても、千変万化、多種多様な様相を描きだし、その様相がそれぞれ異なるのと同様に、読者にもそれぞれ異なった印象を与えることになる。とはいえ、これらはいずれも、広角的描写を行うことである種「春爛漫」の印象をいずれも読者に与えることが出来るのである。

b、擬人法を用いた花の表現

四十八首の中で、四首の例が挙げられる。

「花有清香月有陰（花に清香有り月に陰有り）」（蘇軾

「春宵」

「月移花影上欄杆（月移り花影欄干を上る）」（王安石

「春夜」

「雲想衣裳花想容，春風拂檻露華濃（雲には衣裳を想

い花には容を想う、春風は檻を拂って露華濃（こまや

かなり）」（李白「七〇一―七六二」清平調）

「茶麝香夢怯春寒（茶麝香の夢 春寒を怯ゆ）」（鄭會

「二二一年進士」題邸間壁）

「東風裊裊泛崇光，香霧空濛月轉廊。只恐夜深花睡

去，故燒高燭照紅妝。（東風裊裊として崇光を泛べ、  
香霧 空濛として月は廊を轉がる。只、だ恐る 夜深くして  
花の睡り去くを、故に高燭を燒きて紅妝を照らす。）（蘇  
軾「海棠」）

これらの例は月下或いは深夜に花を描いたもので、読者に間接もしくは直接的に女性を連想させる。「雲想衣裳花想容，春風拂檻露華濃」、「茶麝香夢怯春寒」、「只恐夜深花睡去，故燒高燭照紅妝」の三例は特にそうである。

「雲想衣裳花想容」は、花から佳人の美貌を連想させる。

この詩は本来楊貴妃を詠ったものであるが、特定の間人であることを無視すれば、この詩もまた女性を描いたものと理解することが出来る。花の香りは詩人の空想を誘うに相応しく、更に続く下句は「春風拂檻露華濃」として、春風が欄干を吹きぬけて花についた夜露を払うのである。「濃」の字に用いて花に浮かんだ夜露を形容すること、読者にその香気を彷彿とさせるのである。「茶麝香夢怯春寒」はより一層明確に花の香りと女性を結びつけており、表現の方法は複雑なものではあるが、その内容は茶麝の花の香りが愛妻の夢の中に入り込み、夜更けに彼女を目覚めさせ、春の夜の肌寒さを感じるというものである。三例目の「東風裊裊泛崇光，香霧空濛

月轉廊。只恐夜深花睡去，故燒高燭照紅妝」では、春、花の香、月夜、女性などのモチーフにより緊密な結びつきを与えている。月がかすむなか、そよ風がいっぱいに咲きはこる海棠の花をなびかせ、転じて辺りに花の香が漂い、海棠が夜のうちに眠ってしまうことを詩人は案じ、蠟燭に火をともして花々を照らすという内容である。

これまで三首の詩の描写について触れてきたが、ここでもう一度「花有清香月有陰」「月移花影上欄杆」の二句を再読すれば、これらの詩に隠されているものを見出すことは難くない。これらもまた花を女性の比喩としたもので、その表現はやや複雑なものではある。しかし、月夜に花の香と女性がともに登場するのは伝統的な中国古典詩の中でもしばしば見ることが出来、とりわけ閨怨詩はその傾向が高く、『千家詩』のこれらの詩は閨怨を主題としたものではないけれども、閨怨詩の色調を帯びたものであるとはいえるだろう。

### c、散る花の描写

花に関するものの中でも、この項の例は最も多く、計十一首が挙げられる。その詳細は以下の通りである。

「顛狂柳絮隨風舞，輕薄桃花逐水流（顛狂の柳絮風

に隨いて舞い、輕薄の桃花水を逐いて流る）」（杜甫「漫興」五）

「重重疊疊上瑤台，幾度呼童掃不開（重重疊疊として瑤台上る、幾度と童を呼び掃くも開かず）」（謝枋得

「花影」）

「細數落花因坐久（細かに落花を數うるは坐ること久しきに因る）」（王安石「北山」）

「糝徑楊花鋪白毡，點溪荷葉疊青錢（徑に糝する楊花白毡を鋪き、溪に點ずる荷葉青錢を疊む）」（杜甫「漫興」七）

「雨前初見花間藥，雨後全無葉底花（雨前初めて花間の藥を見るも、雨後全く葉底の花無し）」（王駕「春晴」）

「門外無人問落花，綠陰冉冉遍天涯（門外人落花を問う無く、綠陰冉冉として天涯に遍くす）」（曹豳「春暮」）

「妒花風雨更相催……莫遣紛紛點翠苔（花を妒み風雨更にも相催す……紛紛として翠苔に點しむなかれ）」（朱淑真

「落花」）

「一叢梅粉褪殘妝，塗抹新紅上海棠。開到荼妒花事了，絲絲天棘出莓牆（一叢の梅粉殘妝褪せ、新紅を塗

抹す 海棠に上る。開きて茶麿に到り 花事了れば、絲絲として天棘 莓牆に出づ) (王淇「春暮游小園」)

「雙雙瓦雀行書案，點點楊花入硯池 (雙雙たる瓦雀 書案に行き、點點たる楊花 硯池に入る)」 (葉采「暮春即事」)

「草木知春不久歸，百般紅紫鬥芳菲 (草木 春の久しく歸らざるを知り、百般の紅紫 鬥芳菲たり)」 (韓愈「七六八―八二四」「晚春」)

「三月殘花落更開，小檐日日燕子來 (三月 殘花落ちて更に開き、小檐 日日 燕子來たる)」 (王令「送春」)

これら十一首に見える花の散る様子はきわめて精彩に富んでいる。「細數落花因坐久」「妒花風雨更相催：莫遣紛紛點翠苔」「雙雙瓦雀行書案，點點楊花入硯池」は、花卉がはらはらと散っていく様子を描き、散るといっても、あるものは風雨に打たれて「翠苔」の上に、またあるものは「硯池」の中に散り、またあるものは人間を座らせ、その花びらを「細數」させるなど様々である。

当然ながら花が散ったことを人間に悟らせないものもあり、目にうつる情景が突如別のものに変化している様子を表現しているのは、「雨前初見花間藥，雨後全無葉

底花」「門外無人問落花，綠陰冉冉遍天涯」の二首である。前者は、雨の前には花の芯が結ばれているのを見ることが出来たのに、雨の後には花が雨に打たれて全て散ってしまったことを詠うものである。一方、後者は門の外に花が散ったかを感じつかう人もなく、気づけば辺りの風景がゆったりと茂った緑の木陰に変わっていたということを詠っている。

花の散った後、その花びらが点々と散って数えられるほどである場合の他に、敷きつめるように無数に降り積もる場合もある。「顛狂柳絮隨風舞，輕薄桃花逐水流」では、桃花が突然の大風に見舞われ、いきなり河水に散り落ちてしまうというものであり、「重重疊疊上瑤台，幾度呼童掃不開」で表現される落花は、朝から晩までいくら掃いても掃き尽くすことが出来ないというものであり、散った花が一面に厚く降り積もる様子を連想させられる。「糝徑楊花鋪白毡」では、落ちた楊花 (柳絮) がまるで米粒が地面を埋めつくしたように降り積もり、それはまるで白い絨毯を敷いたかのようにであると詠っている。

また、花散る頃、人は春との別れを惜しみ、花もこの世に未練を覚えて懸命に花を咲かせているという視点か

ら描きだすものもある。「草木知春不久歸，百般紅紫鬥芳菲」と「三月殘花落更開，小檐日日燕子來」の二首がそれである。

これまで例にあげてきた十首はいずれも花の散る様子を描いたものであったが、最後の一首は散る花の順を詠った王淇の「春暮游小園」である。「一叢梅粉褪殘妝，塗抹新紅上海棠，開到荼妒花事了，絲絲天棘出莓牆」と異なった品種の花の盛衰が順に並べられており、まず梅の花が咲き終わったあとに、海棠の花が咲き、続いて荼麿の花が咲き、春の花が全て咲き尽くした後、糸状の棘が高々と伸びて苔の生えた垣根につたう様子を詠っている。

### 三、結　　ひ

民間類書の『錦繡萬花谷』は、『詩選』の底本の一つであると言われている。<sup>19)</sup>この『錦繡萬花谷』巻七には二十五種類の植物の名が見え、その詳細は以下の通りである。

竹、笋、墨竹、柳、梅、黃梅、蠟梅、紅梅、牡丹、  
紅藥、海棠、桃花、李花、梨花、杏花、酴醾、蓮花、

白蓮、木犀、水仙、山礬、落花、總草木、芸、合歡  
丹棘

一方、『千家詩』詠春詩の中に登場する植物は九種類に過ぎず、『錦繡萬花谷』と共通するものは柳、梅、海棠、桃花、杏花、茶麿の六種類である。酴醾はおそらく茶麿のことであり、ともに春に咲く花であること、『錦繡萬花谷』の「酴醾」項に収録されている詩が『詩選』では「茶麿」項の詩として収録されていることから同一の花として推測できる。

『詩選』の「百花門」「竹木門」に収録されている植物は以下の通り。

梅花、桃花、杏花、梨花、海棠、牡丹、芍藥、瑞香、  
茶麿、荷花、蓮花、荔枝、芙蓉、桂花、菊花、蘭花、  
薔薇、葵花、芭蕉、玉蘂花、橘花、山茶、竹、松、  
楊柳、百草

上記の植物は『錦繡萬花谷』に比べると一種類多いのみで、梅、海棠、桃花、杏花、茶麿、芙蓉、楊の八種類は『千家詩』にも見えるものであり、鬱金香のみが『千家詩』にあって『詩選』では見られない植物である。しかし、鬱金香は李白の「客中行」に登場するときには酒を形容するものとして用いられ、より厳密に言うなら

ば鬱金香は詩文の描写対象ではなかったと思われる。とすると、『詩選』に見える花の名は『千家詩』にも全て登場していると言い換えることも出来るだろう。

『詩選』と『千家詩』はともに詩選集であり、総合的な類書としての形式をもつ『錦繡萬花谷』とは異なり、花の名は詩の吟詠対象となつてはじめて選集に収められるのであるが、一方『錦繡萬花谷』に収録される植物にとっては、日常生活に頻繁に登場するかどうかが重要であるのだろう。『千家詩』四十八首のうち、花に言及するものが五十一回に対して、品種を特定する花が十八回で半数近くあり、少ないとは言えないのだが、このことは編纂者の審美眼や、日常生活を題材に志向する宋詩の傾向とも関係がある。詩中の植物が明確な名と形を備えているということは、詩人の外物に対する関心を意味しているものであり、花はもはや抽象的な形として登場するのではなく、詩の内容の主題となったのである。『錦繡萬花谷』と『初学記』の植物の名称を比較すれば、この違いはより明瞭にあらわれるだろう。『初学記』で植物の名が記載されるのは「果木部」のみで、「花部」というものは存在せず、収録されている植物は、李、柰、桃、櫻桃、棗、栗、梨、甘、橘、梅、石榴、瓜、松、柏、槐、

桐、柳、竹の18種類であり、『錦繡萬花谷』に比べるとはるかに少なく、また実用性が高く、ほとんどが觀賞用ではなく食用であることに気づくだろう。<sup>20</sup>『初学記』には花部がないことは既に述べたが、花が季節の雰囲気表現しうるといふ概念は唐代以降に生まれたものである。明人が編纂した『唐詩類苑』には花木類の中に花部三十八種類、草部四十四種類、果部十七種類、木部三十二種類<sup>21</sup>の植物が収録され、『詩選』や『錦繡萬花谷』等の類書に比較的近いと言ふことができるだろう。

『千家詩』は一般に普及した童蒙書であり、その半数以上の詩を『詩選』から引用したものであったが、『詩選』の底本とした大部分は民間類書で、ある意味『詩選』も類書であると言ふことも可能である。類書を基礎に分類を用いて体系的な入門詩選集を編纂するというところから、我々は何を読み取ることが出来るのであろうか。これまでの先行研究のなかで、多くの研究者たちが『千家詩』の長所として四時分類で、その精粹といえるのがこの七言絶句の部分であることを指摘してきた。これらの成果を礎にして、筆者は四時分類の特徴から『千家詩』の分析を試み、四時分類と関係の深いいくつかのモチーフが集中して用いられ、これらのモチーフを多方向

から描写することによって、同一のモチーフをそれぞれ  
織細かつ繁華な姿で表現していることを明らかにしてき  
た。『千家詩』の登場以前は、この種の学習方法は、一  
般読者にとっては類書を参考にすることによって可能で  
あった。しかし、六朝時代に編纂された選集『文選』は  
文体の分類によって配列が行われ、賦、詩、騷、表、上  
書、啓、彈事などの文体の下に、賦を例にすると、京都、  
郊祀、耕藉、畋獵、紀行、遊覽、宮殿、江海、物色、鳥  
獸、志、哀傷、論文、音樂、情といった主題による分類  
が行われている。『文選』は唐代の科挙を受験するよう  
な読書人らにとって必読の詩選であり、『藝文類聚』『初  
学記』のような必読の類書でもあったのである。従来、  
民間類書に注目する人が少なく、そこで本稿では民間類  
書と『千家詩』の關係についての考察を試み、両者が密  
接に関わっていることを示してきた。これらのいわば幼  
稚な童蒙書は常に批判に晒され、また正面から研究する  
者も極めて少なかった。しかし、非常に多くの著名な学  
者たちが、幼き日にこれらの浅薄な童蒙書あるいは類書<sup>22</sup>  
を読み、影響を受けてきたであろうことも確かであろう。  
民間類書が童蒙書に与えた影響についても、今後の研究  
が待たれるところであり、本稿はごく初歩的な試みにす

ぎない。

また、『千家詩』が人事に言及するものが比較的少な  
いということは既に先行研究によって指摘されてきたこ  
とであるが、四十八首の詠春詩の分析から判明したのは、  
詩中で描かれた人事にかかわる内容も、たとえそれが深  
奥な意味と背景をもっていたとしても、詩本文は表面的  
な理解も可能で、複雑な歴史を引きずらないものである  
ということである。四十八首の詠春詩の大部分は春の景  
色を詠み、風景描写のなかで感情のほとばしりを見せる  
もので、中国古典詩歌は抒情を伝統としてきたように、  
そのほとんどが風景描写から一歩進めて情景描写となり、  
これは典型的な手法であるといえるだろう。『千家詩』  
の七言絶句は、風景描写の初歩的訓練として集められた  
ようにも想像できる。入門者は自然の季節天候の変化を  
感知する繊細な感受性とその表現能力を磨き、将来これ  
を基礎に独自の思考が深まれば、風景描写という武器に  
よって自己の感情表現を行うことも可能になるのである  
う。『千家詩』七言絶句はまた、入門者たちが将来自分  
の色彩で塗り上げていくための広い下地を提供している  
とも言えるだろう。

[付録]

『千家詩』咏春詩のモチーフ分類統計(1)

| 「詩名」作者    | 花 | 樹木 | 雨・霧 | 鳥・鳥鳴 | 備註                          |
|-----------|---|----|-----|------|-----------------------------|
| 「春日偶成」程顥  | 1 | 1  |     |      | 傍花隨柳                        |
| 「春日」朱熹    | 2 |    |     |      | 尋芳(1)<br>萬紫千紅(1)            |
| 「春宵」蘇軾    | 1 |    |     |      | 花有清香                        |
| 「城東早春」楊巨源 | 2 | 1  |     |      | 綠柳(1)<br>花似錦(1)<br>看花人(1)   |
| 「春夜」王安石   | 1 |    |     |      | 花影                          |
| 「初春小雨」韓愈  |   |    | 3   |      | 小雨(1)<br>潤如酥(1)<br>煙柳(1)    |
| 「元日」王安石   | 1 |    |     |      | 新桃                          |
| 「上元侍宴」蘇軾  |   |    |     |      |                             |
| 「立春偶成」張翥  |   | 2  |     |      | 草木知(1)<br>綠參差(1)            |
| 「打球圖」晁說之  |   |    |     |      |                             |
| 「宮詞」王建    | 1 |    |     |      | 玉芙蓉                         |
| 「廷試」夏竦    |   |    |     |      |                             |
| 「詠華清宮」杜常  |   |    | 1   |      | 作雨聲                         |
| 「清平調」李白   | 1 |    | 1   |      | 花想容(1)<br>春風(1)             |
| 「題邸間壁」鄭會  | 1 |    |     | 1    | 荼蘼(1)<br>燕子閑(1)             |
| 「絕句」杜甫    |   | 1  |     | 2    | 兩個黃鸝(1)<br>翠柳(1)<br>一行白鷺(1) |
| 「海棠」蘇軾    | 1 |    | 1   |      | 香霧空濛(1)<br>花睡去(1)           |
| 「清明」杜牧    | 1 |    | 1   |      | 雨紛紛(1)<br>杏花村(1)            |
| 「清明」魏野    | 1 |    |     |      | 無花(1)                       |
| 「社日」王駕    |   |    |     |      |                             |
| 「寒食」韓翃    | 1 | 1  | 1   |      | 飛花(1)<br>御柳斜(1)<br>輕煙(1)    |
| 「江南春」杜牧   | 1 | 1  | 1   | 1    | 千里鶯啼(1)<br>綠映紅(2)<br>煙雨(1)  |

## 『千家詩』咏春詩のモチーフ分類統計（2）

| 詩名 作者      | 花 | 樹木 | 雨・霧 | 鳥、鳥鳴 | 備註  |
|------------|---|----|-----|------|---|
| 「上高侍郎」高蟾   | 3 |    | 1   |      | 碧桃（1）<br>紅杏（1）<br>芙蓉（1）<br>露種（1）            |
| 「絶句」僧志南    |   | 2  | 2   |      | 古木（1）<br>沾衣欲濕（1）<br>杏花雨（1）<br>楊柳風（1）        |
| 「遊園不值」葉紹翁  | 2 |    |     |      | 春色滿園（1）<br>紅杏（1）                            |
| 「客中行」李白    | 1 |    |     |      | 鬱金香   |
| 「題屏」劉季孫    |   |    |     | 2    | 燕子（1）<br>呢喃（1）                              |
| 「漫興」杜甫     | 1 | 1  |     |      | 柳絮（1）<br>桃花（1）                              |
| 「慶全庵桃花」謝枋得 | 2 |    |     |      | 桃紅（1）<br>花飛（1）                              |
| 「玄都觀桃花」劉禹錫 | 2 | 1  |     |      | 紫陌紅塵（1）<br>看花（1）<br>桃千樹（1）                  |
| 「再遊玄都觀」劉禹錫 | 3 |    |     |      | 桃花（1）<br>種桃（1）<br>菜花（1）                     |
| 「滁州西澗」韋應物  |   |    | 1   | 2    | 黃鸝（1）<br>深樹鳴（1）<br>春潮帶雨（1）                  |
| 「花影」謝枋得    | 1 |    |     |      | 花影（1）                                       |
| 「北山」王安石    | 1 |    |     |      | 落花（1）                                       |
| 「湖上」徐元杰    | 1 |    |     | 2    | 花開紅樹（1）<br>亂鶯啼（1）<br>白鷺飛（1）                 |
| 「漫興」杜甫     | 1 |    |     | 1    | 楊花（1）<br>鳧雛（1）                              |
| 「春晴」王駕     | 3 |    | 1   |      | 花間蕊（1）<br>葉底花（1）<br>春色（1）<br>雨前（1）<br>雨後（1） |
| 「春暮」曹豳     | 1 |    |     | 1    | 落花（1）<br>林鶯啼（1）                             |

## 『千家詩』咏春詩のモチーフ分類統計（3）

| 詩名 作者      | 花  | 樹木 | 雨・霧 | 鳥、鳥鳴 | 備註  |
|------------|----|----|-----|------|---|
| 「落花」朱淑真    | 3  |    | 1   |      | 花正開（1）<br>妒花（1）<br>點翠苔（1）<br>風雨（1）            |
| 「春暮遊小園」王淇  | 3  |    |     |      | 梅粉（1）<br>海棠（1）<br>荼蘼（1）                       |
| 「鶯梭」劉克莊    | 1  | 2  |     | 2    | 鶯梭（1）<br>擲柳（1）<br>遷喬（1）<br>交交（鳥鳴，1）<br>花如錦（1） |
| 「暮春即事」葉采   | 1  |    |     | 1    | 雙雙瓦雀（1）<br>楊花（1）                              |
| 「登山」李涉     |    |    |     |      |   |
| 「蠶婦吟」謝枋得   |    | 1  |     | 1    | 子規（1）<br>楊柳月（1）                               |
| 「晚春」韓愈     | 3  | 1  |     |      | 草木（1）<br>百般紅紫（1）<br>楊花（1）<br>作雪飛（1）           |
| 「傷春」楊萬里    | 1  |    |     |      | 看花  |
| 「送春」王令     | 1  |    |     | 3    | 殘花（1）<br>燕飛來（1）<br>子規（1）<br>啼（1）              |
| 「二月晦日送春」賈島 |    |    |     |      |   |
| モチーフ登場回数   | 51 | 15 | 15  | 19   |   |
| 詩総数        | 34 | 12 | 12  | 12   |   |

（作者は香港教育学院中文系副教授、訳者は渡邊登紀、京都大学大学院博士課程）

注

- (1) 『續修四庫全書』編纂委員會編、『續修四庫全書・經部小學類』(清乾隆十六年翟氏無不宜齋刻本影印、上海、上海古籍出版社、一九九五二〇〇二)、卷一九四、三四七頁。
- (2) 李更・陳新、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』考述、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』(傳為劉克莊編集、李更・陳新校證、北京、人民文學出版社、二〇〇二年十二月)、九〇六一九〇八頁。
- (3) 劉鶚『老殘遊記』(北京、人民文學出版社、一九八二年四月)、七四頁。
- (4) 李宗為校注講析、『千家詩・神童詩・續神童詩』(上海、上海古籍出版社、一九九三)、五八頁。
- (5) 李宗為、六六頁。
- (6) 李宗為、二八頁。
- (7) 李宗為、五三頁。
- (8) 李宗為、十七頁。
- (9) 李宗為、十五頁。
- (10) 李宗為、三二頁。
- (11) 李宗為、四一頁。
- (12) 李宗為、四〇頁。
- (13) 李宗為、十三頁。
- (14) 李宗為、十四頁。
- (15) 李宗為、十六頁。
- (16) 李宗為、六二頁。
- (17) 李宗為、六七頁。
- (18) 李宗為、三七頁。
- (19) 李更・陳新、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』考述、『分門纂類唐宋時賢千家詩選』(前掲書、八九六一九〇〇頁)。
- (20) 中国古典詩歌が実用的な果実類に偏っていることを最初に指摘したのは水上静夫氏(一九三二)『中国古代の植物学の研究』(東京・角川書店、一九七七年四月初版、一九八二年九月再版)である。また小川環樹氏(一九一〇―一九九三)はその名著『大自然對人類懷好意嗎?——宋詩的擬人法』の中で、宋詩の特徴は日常性にあり、自然を人に親しみ深いものとさせることで宋代から擬人法が始まったと指摘されている。(小川環樹・譚汝謙編、譚汝謙・陳志誠・梁國豪共訳『論中國詩』(香港、香港中文出版社、一九八六)、八二―九〇頁)。その他、小川博士は、宋以前の中國詩歌が植物の名称を特定する例はきわめて少なく、宋人の中では陸游の詩に植物の名称が最も多く登場し、これが陸游の特色であるとも述べている(参考『小川環樹著作集』三卷)。
- (21) 中島敏夫編、『唐詩類苑』第六卷、三三八―三三九頁。
- (22) 葛兆光はかつて『中國思想史』の中で多くの用例を指摘している。